



山西省の東南端、河北省と河南省に接する所に太行山大峡谷があります。

ここは数億年前に海底であった所が隆起し、その後、風化と浸食作用によって深く削られ、高い岩壁がそそり立つ大峡谷となりました。その中に、いくつかの、水と緑の豊かな、美しい景観の渓谷が森林・地質公園として整備されています。4月下旬に訪ねてみました。

\*\*\*\*\*

第一日目： 出発は北京から飛行機で1時間の山西省・長治市。そこから車で約1時間、両側に低い丘陵が続く農村地帯を抜けると、徐々に山が高くなり、両側に山の斜面が間近になってきた頃に大峡谷の入り口につきました。

途中の農村では小麦畑が青々とし、木の葉の柔らかい緑色、桐の花の薄紫色、桜桃の桃色、杏の白色など、これらの色が溶け合うようにして、目と心を楽しませてくれました。

大峡谷に入り、山が眼前に迫ってくると、斜面が黄色のレンギョウの花でいっぱい埋め尽くされているのに驚きました。このあと、どこへ行っても山の斜面はレンギョウの花で一杯でした。現地ガイドによると、このレンギョウは当地ではインチャオ(銀翹)と呼ばれ、茎は風邪によく効く漢方薬の材料として使われ、さらに昔は、秋に太めの茎を刈り取って、屋根を葺く材料にも使われ、とても有用な植物なのだそうです。

入口からさらに進むこと約1時間、ようやく一番奥まったところにある目的地の「青龍峡」につきました。途中、曲がりくねった道の両側は一段と狭まり、首を90度に曲げて見上げた空は狭い岩壁と岩壁の間で青く細い筋のようでした。駐車場に地質博物館がたっていました。残念ながらまだ開館準備中で、中の展示を見ることはできませんでしたが、公園内の遊歩道のところどころにいろいろな岩石の説明があり、足を止めてしばし岩石を眺めたり、触ったり、歩きながらのミニ体験学習もなかなか楽しいものでした。

全長約5 kmの青龍峡では入口のある下流から上流に向かって遡り、一番奥にある集落のところから引き返すという、ゆっくり歩いて約3時間の周遊コースになっています。峡谷両側の壁と壁の間の幅は広く、岩石がごろごろしている河原には草や花も多く、そのせいか明るい開放感を覚えました。緩やかなアップダウンを繰り返しながら、小さな草花に目を留め、岩を眺め、岩壁から落ちてくる滝を眺めつつ遡り、昼食は途中の小さな集落の農家の食堂で

とりました。メニューはタンポポの葉、セリ、チャンチン(香椿)、エンジュの花など、今の季節に採れるこの土地の野草や木の若葉、花の料理や、目の前の小川でとれた小魚の唐揚げなど、どれも美味しく、しかもこれまでの中国料理のイメージとは全く違うものをいただくことができました。

ガイドによると、現代の中国人はストレスの多い生活をするようになったので、最近、このような自然の魅力にあふれた場所へやってきて、森林浴をして新鮮な空気を吸い、歩くことによって身体を鍛え、土地の新鮮な食べ物を食べるという休暇の過ごし方に人気が出てきたのだそうです。農家民宿もいくつかありました。ゆっくり滞在する人も増えつつあるそうです。

\*\*\*\*\*

第2日目は「紅豆(hóngdòu) 峡」へ行きました。渓谷の名前は本来亜熱帯気候地域に育つ紅豆杉(別名：相思木)が、わずか1000株ほどですが、この渓谷に育ち、非常に貴重なものとして、国家級保存樹木に認定されたことから来ています。その赤い種子は小豆大ですが、永遠に変わらない想いを表すものとして、恋人や友人への贈り物として人気があるそうです。

この渓谷は、入口は狭く、中ほどは少し広く、ちょうど瓢箪の形のように、しかも両側には高い岩壁がそそり立っています。そういう地形から、渓谷内の気温や湿度が周りの場所と比べて少し高く、植物の種類が多く、紅豆杉以外にも希少な植物が多いそうです。「紅豆峡」は「青龍峡」の明るい広がりのある姿とは違い、両側から高い岩壁がぐっと迫ったり、張り出しており、狭い渓谷の底の岩の間を縫うように歩くので、圧迫感や緊張を覚えました。

岩の隙間から高く見上げる空は「一線天」と言われる細い筋のようです。遊歩道は大きな岩に取り付けられた鉄製の栈道や梯子、階段などが多く、足の下を流れる水や淵が見え、スリルを覚えます。渇水期だったので水量は少なかったのですが、夏の水量の多い時には水の流れはさぞかし迫力があり、スリルも増すことでしょう。岩と岩との間に渡されている梯子や階段は勾配が急で、ちょっと息が切れました。岩壁を抜けると山の斜面に取り付けられた石の階段になりました。これも勾配がきつく、途中で休憩をしながら上りました。私は登山用の装備で、一応非常用の食料や雨具なども持って上りましたが、一緒に登っていた中国人たちの多くは、町で履く普通の靴、手には水の入った

山西省の東南端、河北省と河南省に接する所に太行山大峡谷があります。

ここは数億年前に海底であった所が隆起し、その後、風化と浸食作用によって深く削られ、高い岩壁がそそり立つ大峡谷となりました。その中に、いくつかの、水と緑の豊かな、美しい景観の溪谷が森林・地質公園として整備されています。4月下旬に訪ねてみました。

\*\*\*\*\*

第一日目： 出発は北京から飛行機で1時間の山西省・長治市。そこから車で約1時間、両側に低い丘陵が続く農村地帯を抜けると、徐々に山が高くなり、両側に山の斜面が間近になってきた頃に大峡谷の入り口につきました。

途中の農村では小麦畑が青々とし、木の葉の柔らかい緑色、桐の花の薄紫色、桜桃の桃色、杏の白色など、これらの色が溶け合うようにして、目と心を楽しませてくれました。

大峡谷に入り、山が眼前に迫ってくると、斜面が黄色のレンギョウの花でいっぱいに埋め尽くされているのに驚きました。このあと、どこへ行っても山の斜面はレンギョウの花で一杯でした。現地ガイドによると、このレンギョウは当地ではインチャオ(銀翹)と呼ばれ、莖は風邪によく効く漢方薬の材料として使われ、さらに昔は、秋にための莖を刈り取って、屋根を葺く材料にも使われ、とても有用な植物なのだそうです。

入口からさらに進むこと約1時間、ようやく一番奥まったところにある目的地の

「青龍峡」につきました。途中、曲がりくねった道の両側は一段と狭まり、首を90度に曲げて見上げた空は狭い岩壁と岩壁の間で青く細い筋のようでした。駐車場に地質博物館がたっていました。残念ながらまだ開館準備中で、中の展示を見ることはできませんでしたが、公園内の遊歩道のところどころにいろいろな岩石の説明があり、足を止めてしばし岩石を眺めたり、触ったり、歩きながらのミニ体験学習もなかなか楽しいものでした。

全長約5 kmの青龍峡では入口のある下流から上流に向かって遡り、一番奥にある集落のところから引き返すという、ゆっくり歩いて約3時間の周遊コースになっています。峡谷両側の壁と壁の間の幅は広く、岩石がごろごろしている河原には草や花も多く、そのせいか明るい開放感を覚えました。緩やかなアップダウンを繰り返しながら、小さな草花に目を留め、岩を眺め、岩壁から落ちてくる滝を眺めつつ遡り、昼食は途中の小さな集落の農家の食堂で取りました。メニューはタンポポの葉、セリ、チャンチン(香椿)、エンジュの花など、今の季節に採れるこの土地の野草や木の若葉、花の料理や、目の前の小川でとれた小魚の唐揚げなど、どれも美味しく、しかもこれまでの中国料理のイメージとは全く違うものをいただくことができました。

ガイドによると、現代の中国人はストレスの多い生活をす



↑ 紅豆峡 岩壁の間に続く道  
← 青龍峡にかかる滝



鋸歯のような王莽嶺



上図は山西省全図 色の濃い部分が太行山森林公園のある壺関県。壺関県の右半分が太行山森林公園区域。